

学級編成論の視点からの修身科教授法（口授法）の考察

——「講堂訓話」の成立背景・過程——

Consideration on the Teaching Method of Moral Education
(Shū-Shin) from the Viewpoint of Class-Organization

麻 生 千 明

Chiaki Asoh

本論文の意図

私は今まで単級学校の教授法に関し、移入性と慣行すなわち従前の合級教授との関連に視点を置いて、その理論の形成過程と特質、実態、用語概念等について考察してきた⁽¹⁾。ところでその教授法の理論及び実態を、より掘り下げるには各科教授法、教科教育史というレベルにおいて考察する必要があると思われる。

異学年の児童生徒から成る学級（学校）において能う限り同時同学科同教材による合同教授を志向する単級教授法にあって、実際的には学級内の部（組）分けということが重要な問題として講究がなされたのであった。その組分けの基準としては児童生徒の年令（学年）、学力などとともに教科の特質や教授方法ということがとりわけ重要視された。すなわち教科、教材、教授方法等に依る自在な組の分合にこそ合級教授と区別される単級教授の特質が求められたのであった。

本論文においては、単級教授法およびその前史とも言うべき合級教授法研究における各科教授法に関する論及のなかで、特に全学年合同教授が比較的可能かつ有効と思惟された修身科をとりあげ、その論拠および教授方法を考察しようとするものである。すなわち、“合級・単級教授法における修身科教育の考察”とも言うべき本考察は、一方修身科教育（史）というサイドからみると、表題にも掲げたように“学級編成論の視点からの修身科教授法の考察”とでも言い得るであろう。

周知のように修身科は、「学制」下の文部省「小学教則」（明治5年・1872年）に於いて「修身^{ぎようぎのさとし}口授」との学科目名で発足、開化啓蒙、知育重視の明治初期においてはさほど重視されなかったのであるが、自由民権運動の昂揚等を背景に、それへの対処的意図をも込めて明治12（1879）年に公布される「教学大旨」を大きな契機とする儒教主義的徳育強化路線のなかで、「改正教育令」（明治13年・1880年）において筆頭教科に位置づけられ、さらに明治23（1890）年の「教育勅語」頒布以後は、勅語

を中心に修身科教授が展開されるなど、戦前においては最も重要視された教科と言うべき存在であった。

ところでその修身科教育史に関しては、これまで教育政策との関連において修身科教科書、教材の分析等を通して内容の変遷を迎えるという、いわば教育内容史に関しては多くの先行研究を有していると言えようが⁽²⁾、その教育方法史に関しては必ずしも充分究明されているとは言えない現状にあるように思われる。とりわけ教育教授の対象たる児童生徒の編成に視点を置いての方法史の究明は皆無に近いと言っても決して過言ではないであろう。しかし思うに「教育勅語」が公布され修身科教育が重視されていく明治20年代という時期は、学級・学校編成史的にみれば単級学校や複式学級形態がかなりの比重を占めていたという実態的背景を考えると、修身科教授法（史）を児童生徒の編成という視点から考察することは極めて重要不可欠と言わなければならないと思う。事実例えば、以下本稿で考察するように、修身科教授において教師の口授に依るべきか教科書に依るべきかという問題は、森文政期を中心とする一時期熾烈な、かつ時代を通じての論争問題ともなったものであるが、それは確かに教育方法における教師や教科書の位置や役割をめぐる主として方法観、方法原理に関する問題であったと言える。と同時にそれは、学級編成の実実やそのあり様にも深く関わり、それらに規定されるという要素を多分に有していたと思われるのである。

すなわち結論的に言うと、修身科における口授という方法は、それ自体の方法的長所にも拠ることながら、単級ないし複式という明治20年代前後の支配的学級（学校）編成形態にも支えられるという一面を有していたのであり、それが明治30年代頃から顕著となる多級学校化のなかで、校長による全校訓話すなわち「講堂修身」「講堂訓話」という形態で普及定式化していく伏線をなしていたように思われるのである。副題に掲げた「『講堂訓話』の成立背景・過程」ということは、したがって本考察の

帰結的結論の表示でもある。

1. 合級・単級教授論における修身科教授法 ——全級教授の可能性と有効性——

明治16(1883)年9月22日に新潟県南蒲原郡教育会が開催された折りの討議題のひとつに「修身講談を授くるに全校生徒を一場に集め置くと毎級を区別し学力の進度に応じて口授するとの得失如何⁽⁴⁾」ということが挙げられている。修身科教授においては「学制」以来口授法が広く行われ、しかも等級別教授が原則とされていたなかにあつて⁽⁴⁾、全級合同教授と等級別教授との得失、換言すれば全級教授の可能性、有効性を探ろうとするこの議論は、以後伏流する修身科教授における問題(課題)の在りかを端的に示すものとして極めて注目に値するものと言える。事実、明治10年代(第1次小学校令期)の合級教授論、および明治20年代以降(第2次小学校令期)の単級教授論における修身科教授に関する言及部分を辿っていくと、児童生徒の学力差(学年差)にも拘らず修身科のみは全級教授が不可能ないし有効であるとする主張が一定の位置を占めていることに気づかされるのである。そうした論著のいくつかを、以下紹介検討していくことにする。

(1) 合級教授論における修身科教授法

① 伊東忍編著『小学合級授業法』(明治17年・1884年)
合級編成という実態が広範化しつつあつた明治10年代後半期において、そうした現実にも有効に機能しうる教授法の指導理論の提供を期して刊行された、合級教授に関する最初の本格的理論書ともいふべき『小学合級授業法』(伊東忍編著 明治17年)の中に修身科教授法に関する次の叙述がある。

「爰ニ一ノ大問題アリ修身学教授法ハ如何ニナスヘキヤノ件是レナリ教則綱領ニ於テハ⁽⁵⁾初等ニアリテハ簡易ノ格言事実等中等高等ニアリテハ稍高尚ナル格言事実等ト頗ル自由ノ区域ヲ与ヘラレタレモ實際ニ於テハ東京府ノ如キ毎級其用書ヲ異ニシ一期間ニハ必ズ読ミ了リ記憶シ了ラザルベカラザルノ制ナリ他府県モ蓋シ然ルベキナリ⁽⁶⁾」(傍点ママ)

先ずこのように等級別教科書使用という大方の実状を述べ、したがって「之ヲ詳論セント欲セバ先ツ修身論ヲ細密ニ論定シ而シテ善良ナル教科書ヲ編纂セザルベカラズ⁽⁶⁾」と良教科書編纂の必要を述べる。しかし「是レ固ヨリ容易ノ事ニアラザレバ今日ハ唯教則ノ企図シタル程度ヲ教ヘ了ルヲ期シ其規定ニ反セサルノ限度内ニ於テ合級授業ニ必要ナル修身学教授法ヲ説カントス⁽⁶⁾」と述べ、修身科における合級教授について以下のように説いている。

「合級授業ニ於テハ時トシテハ各生徒ヲ合一シ或ハ兩部ニ分チテ修身学ヲ授クルヲ得ベシ 時トシテナル四字ハ甚タ緊要ナルモノナリ決シテ常ニ之ヲ行フベキノ意ニアラズ常ニハ各々宛テハメラレタル書ニ就テ講究ヲナシ時トシテハ小学修身教科書中何レノ部分ヨリカ誰人ニモ解シ得ベキ且稍高尚ノ意義ヲ寓シタル事実格言ヲ撰ヒテ講述スベキナリ修身学ハ他ノ学科ト異レバ上下ノ級ヲ合一シテ之ヲ授クルモ功ヲ奏セザルノ理ナシ⁽⁶⁾」(傍点引用者)すなわち修身科は各級生徒を合一して教授し得るとするが、決して恒常的にはなく「時トシテハ」と言わば例外的に認めているところに、あくまでも等級別教授を原則としている立場が窺える⁽⁷⁾。しかしそうした原則のなかでもかくも修身科における全級教授の可能性を説き、その根拠として「修身学ハ他ノ学科ト異レバ上下ノ級ヲ合一シテ之ヲ授クルモ功ヲ奏セザルノ理ナシ⁽⁶⁾」と修身科(修身学)の特質を挙げている点がここで注目されるのである。

なお、同じ項の『教育時論』の「教育経済論」と題する「社説」のなかに、次の如き同様の論旨を見出すことができ、これも注目される。

「学科に依りては格別従来の学力を要せざる如き者なきにあらざる修身学の如き是なりこの学は巧に愉快なる談話を与へて生徒の感情を喚ひ起し以て其徳性を涵養するときは即其目的を達する者なれば各級別々に之を授くるを要せず二三級若くは全級の生徒を一時に教育するをよしとす⁽⁸⁾」

感情の喚起、徳性の涵養という修身科の要旨、目的との関連において全級教授の可能性を主張しているわけである。このように合級教授といっても当初は等級別原則を固持して時間割編成においても殆んど異学科組合せであつたものが、次第に各学科の特質等への考慮がなされ、それらを顧慮しつつ同時同学科を志向しての学科組合せに関する研究と実践が促がされていくこととなる⁽⁹⁾。そうした動向のなかで特に修身科は、その教科の特質等から全級同時教授が最も可能な教科であるとの結論が、ほぼ共通的に導き出されていくこととなる。次に白井毅と金沢長吉の論著等において検討してみたい。

② 白井毅『学級教授術 全』(明治20年・1887年)

ペスタロッチー主義に基づく代表的教授法指導書ともいふべき『改正教授術』を明治16(1883)年に、高嶺秀夫の指導のもとに若林虎三郎と共著で公にした白井毅は、また合級教授法に関してもいくつかの論著を著わしている。すなわち明治19(1886)年には雑誌『教育時論』に「合級教授法ノ意見」と題する論説を寄せ学科組合せ等について論じている。そこで彼は学科を大別して「発

音ヲ要スルコト多キ学科ト発音ヲ要スルコト少キ学科ヲ
 排列ス⁰⁰」案（甲法）、及び「授業上ノ状態可成同ジキ
 モノヲ排列ス⁰⁰」案（乙法）の2つを挙げ、「甲法ハ外
 面ヨリ見ルトキハ教生共ニ不便ヲ感ゼザルガ如クナレド
 モ凡シ思フ要スル学科ハ四辺静粛ナルニアラズンバ不
 可⁰⁰」との理由から甲法は不都合とし、むしろ乙法の方
 を白井は推奨している。

さらに彼は翌20（1887）年11月に普及社より『学級教
 授術 全』との著書を公開、同書において彼は学級の種
 類を単一学年から成る学級と複数学年から成る学級の二
 種に区分し、各々の授業法を「甲種授業」「乙種授業」
 と命名している。彼のここにいう「乙種授業」こそ合級
 教授に他ならないのであるが、彼は「乙種授業法ヲ講究
 センニハ先ヅ学科編制ノ標準ヲ定ムルヲ要ス⁰⁰」と述べ、
 その標準として「教授上ノ事情」と「学習上ノ事情」の
 双方を考査し「可成教師生徒ノ両者ヲシテ便宜ヲ得ベカ
 ラシムベキナリ⁰⁰」としている。ところでその「教授上
 ノ事情トハ則チ教授ノ繁簡難易等専ラ教師ノ都合ニ関ス
 ルモノ⁰⁰」であり、「学習上ノ事情トハ沈思熟考謹聴黙
 読音読筆記口述等専ラ生徒ノ都合ニ関スルモノヲ云フ假
 令バ修身科ハ謹聴ノ部ニ属シ⁰⁰算術科ハ専ラ沈思熟考ノ
 部ニ属シ読方科ハ（音読）黙読ヲ兼シ作文科ハ口演熟考
 及ビ筆記等ノ数者ヲ兼ヌルガゴトシ⁰⁰」と述べている。

このように教授上、学習上の観点から諸教科の特質を
 より詳細に考察し編成すべきであるとしているが、彼の
 作成による尋常科2、3、4学年から成る各々の学級の
 時間割例をみると、「謹聴ノ部ニ属」する修身科はいず
 れも第1時限に毎日体操30分のあとに15分ずつ⁰⁰全学年
 同学科で配置されていることが認められる。そしてその
 教授法（修身口授）について「修身口授ハ難易相混ジ或
 ル部分ハ最モ劣等生ニ適シ又或ル部分ハ最モ優等生ニ適
 シ又或ル他ノ部分ハ最モ中等生ニ適セシムルガ如ク学力
 ノ懸隔スルニ從テ教案ヲ数段ニ分割シ可成全生徒ニ治子
 カラシムベシ⁰⁰」と全級合同教授を前提としたうえで
 「可成全生徒ニ治子カラシム」るための留意事項が述べ
 られている。

③ 金沢長吉「合級授業ノ方法」（明治21年・1888年）

明治21（1888）年発行の『大日本教育会雑誌』の75、
 77、82の各号に金沢長吉による「合級授業ノ方法」と題
 する論説が掲載されている。それは「豫テ本会ニ於テ提
 出シタル題名ノ懸賞問題ニ対スル答案中最高点ヲ占メ、
 一等賞ヲ得タルモノ⁰⁰」であることから、当時のオー
 ソドックスかつドミナントな論であったと見做すことが
 出来よう。ここで金沢は「諸学科ノ排置法」につき「諸
 ノ学科ヲ排置セント欲セバ先ヅ其学科ノ性質ヲ点検セザ

ルベカラズ⁰⁰。」として「今諸学科ノ性質如何ヲ調査スル
 ニ、発音講読セザルベカラザルモノアリ、読書科ノ如キ
 是ナリ。沈思黙考セザルベカラザルモノアリ、修身、算
 術、作文ノ如キ是ナリ。技術ニ属シテ手ト眼トノ習慣ヲ
 専ニスルモノアリ、習字、図画ノ如キ是ナリ⁰⁰。」と各学
 科をその性質によって分類している。その分類の仕方
 には先程の白井毅の論の影響が多分に感じられるが、彼は
 さらに同学科でもその状態に種々あるとして次のように
 述べる。

「又同学科ト雖モ之ヲ細別スルトキハ種種ノ状態ヲ異
 ニセリ、例ヘバ、算術科ニ数理ノ教授アリ、応用問題ア
 リ、同題中又式題アリ、設題アリ、式題ハ思慮ヲ要セザ
 ルモ、設題ハ之ニ反ス。読書科に於ルモ朗読アリ、講義
 アリ、又修身ノ如キモ口述ニ止ルアリ、書籍ノ講読ア
 リ、又諸科ヲ復習スルニ口答アリ、筆答アル等頗ル繁多
 ナルモノナリト雖モ、合級授業ヲ施サント欲セバ精密ニ
 此等ノ諸点ヲ考ヘザルベカラザルナリ⁰⁰。」

このように諸学科の特質や授業の状態を勘案しつつ学
 科の配置、時間割の編成をしなければならないとしてい
 る。さらに彼は「実地授業法」の章において各学科毎の
 教授法について詳述しているが、修身科については「修
 身ノ授業ハ先ヅ一年生ヨリ之ヲ始メ、終レバ之ヲ扣廻ニ
 出シ、次ニ二年生ヲ引卒シ来リテ授業シ、漸次三年生、
 四年生ニ及ブベシ⁰⁰。」と学年別（等級別）教授を原則と
 しつつも、教学年同時教授も可能であると次のように述
 べている。

「修身ハ学級ヲ異ニスルモ、授業ノ事実ヲ異ニスルノ
 必要ナキコトアリ。此ノ如キハ全級ヲ合シテ、同時ニ同
 一事実ヲ授業スルモ妨ゲナカルベク、或ハ一年生ト二年
 生トヲ合シテ一組トナシ、或ハ二年生ト三年生トヲ合シ
 テ一組トナシ、或ハ三年生ト四年生トヲ合シテ一組トナ
 シ、同一事実ヲ同時ニ教授スルコトモアルベシ。……又
 一年生、二年生及ビ三年生トヲ組合セタルモノハ、一年
 生ト二年生トヲ合シテ一組トナシ、三年生ヲ一組トナシ
 別別ニ教授シ、一年生、二年生、三年生及ビ四年生ヲ組
 合セタルモノハ、一年生ト二年生、三年生ト四年生トヲ
 合シテ二組トナシ、別別ニ之ヲ教授スヘシ。但シ時宜ニ
 依リテハ合シテ同時ニ之ヲ教授スルコトモアルベシ⁰⁰。」

以下2、3、4学年合級の時間割例が掲記されてい
 るが、読書一習字一算術の異科組合せと作文、体操、修身
 は各級同科の方針を採っている。特に修身は成るべく時
 間を短かく度数を多くし、かつ心意の活潑な時を選ぶべ
 きことから午前の最初に⁰⁰毎日15分ずつ配置されている
 のが特徴点と言えるであろう。

以上のように合級教授法期における合級教授論におい
 ては、等級別教授を原則としつつも同時同科を志向する

なかで特に修身科については全学年合同ないし2学年合同の教授が教科の特質からみて可能とする結論が導かれつつあったと言うことが出来よう。因みに上記以外の他の合級教授論をいくつか例示しておきたい。『信濃教育会雑誌』（明治19年・1886年）中の論説「合級教授論」には「修身習字体操等ハ同一ニ教授スヘク編制シ置クヘン^㉒」とあり、また雑誌『教育』（明治23年・1890年）に連載の「合級教授法」においては「課業ニヨリテハ数級ヲ合シ一斉ニ教授シ得ベキモノアリ即チ修身、唱歌、体操ノ課ニ於ケルガ如シ^㉓」「修身ト唱歌トハ下級ヨリ上級ニ至ルマデ隔日ニ三十分ヅ、全級一斉ニ教授シ、体操モ同ク毎日三十分ヅ、全級一同ニ運動セシムル^㉔」とある。なお2学年ずつ合級の修身教授も実際に行われていたようである。「修身教授ハ一年二年ヲ甲ノ組トシ三年四年ヲ乙ノ組トシ隔日三十分間ツ、之ヲ教フ^㉕」といった明治20（1887）年当時の学事報道がある。

(2) 単級教授論における修身科教授法

明治23（1890）年、「小学校令」公布により単級学校が法制的成立をみてより以後は、単級教授法に関する研究の盛行をみることが出来る。全学年児童を一学級（学校）に編成する単級学校に於いては、ドイツ等の単級教授の理念や方法に学び、同時同学科（同教材）教授を理念・原則とするようになるが、実際的には学科の特質や教授の方法等を顧慮しての適宜な組（部）分けについての講究と実践がなされていくことになる^㉖。そしてその点に合級教授法期における同時同科を志向しての学科組合せに関する研究（成果）の継承をみることが出来るのであるが^㉗，“級（等級）の集合”から“学級の分解”へという原理自体の推移転換が各科教授における組分け論にやはり濃厚に反映しているように思われる。すなわち修身科教授法に関しては、すでにみたように合級教授法期においてはやゝ例外的可能性として認められていた全級教授が、単級教授法研究においては言わば前提的出発点に位置づけられている点に大きな相違をみることが出来るように思われるのである。以下いくつかの研究例において検討してみることにしよう。

① 須永和三郎の研究

埼玉師範学校訓導須永和三郎は明治26（1893）年、『教育時論』に「単級教授ノ一班」との論説を寄せ、単級学校における部分けのことにについて次のように論じている。先ず部分けの基準として生徒の学力・年齢（学年）があるが、「凡テ部分ケハ出来得ル丈ケ之ヲ少クスルヲ以テ、却テ利益アリトス^㉘。」ということから尋常科の場合第一年生を一部、第二年生を二部、第三、四年生を合わせて三部と都合三部に、また高等科の場合は第

一、二年生を一部、第三、四年生を二部と都合二部に分ける案を提起している。しかし「以上ハ所謂編制上ノ部分ケニシテ、一年間諭ラザルノ称呼ナレドモ、各教科目ヲ教授スルニ当リテハ、必ズシモ之ニ拘泥セザルヲ可トス。即チ教科目ノ性質ニ依リ、或ハ合シ、或ハ分チテ、教授ヲ施スヲ以テ、却テ便利多シトス^㉙。」と教科目の種類に応じての分合の重要性を述べたうえで「例ヘバ修身科ノ如キハ、全校児童ヲ一部トシテ、之ヲ授ケ、算術ノ如キハ、寧ロ之ヲ四部ニ分チテ、教授スルノ利便アルガ如シ^㉚。」と述べている。時間割例を掲記した箇所にも「備考」として「修身ノ如キハ或ハ一部二部三部ヲ合シテ一組トシ、之ヲ授クルコトアリ。或ハ一部二部ヲ一組トシ、三部ヲ一組トシ、テ之ヲ授クルコトアルナリ^㉛。」と修身科に関しては全学年合同あるいは2学年ずつの2組に分けるのが妥当としている。後述するようにこの問題は教授法（口授法vs教科書教授）とも関わってくるのであるが、須永の論にみられるように修身科教授においては全学年合同あるいは2学年合同の授業形態が論においても一般化しつつあったようである。

なおこの部分けについては教科書のあり方も大きく関わってきたもののようで、須永は時間割に関して読書と習字、読書と作文というように幾分か異学科組合せを振り入れた「甲」表と全て同学科組合せの「乙」表の二案を提示し、教科書が完備すれば乙表でも可能であるが「今日教科書等、単級教授ニ適スルモノ、未ダ出来セザルノ間ハ、止ムヲ得ズ、略ボ甲表ニ依ラザルヲ得ザル可シト雖モ、将来其完備ヲ待チ、乙表ニ依ランコトハ、尤モ望マシキコトナリ^㉜。」とも述べている。

② 大日本教育会単級教授法研究組合の研究

明治27（1894）年1月大日本教育会のなかに単級教授法研究組合が結成され単級学校、単級教授に関する種々の研究がなされ^㉝、その研究報告が教育雑誌等に掲載されているが、その報告書中「単級小学校各学科教授の順序及び方法」と題し「修身科」については次のように述べられている。

「修身科ハ各組同時に同一教材に由りて教授すべきものなれば、其の事実ハ各組に通じて適当なるものを選ぶこと肝要なりと雖、各組生徒の学力年齢等に差異あること勿論なれば、同一の事実を教授するに方り、各組に通じて盡く適当ならしむことハ到底為し能はざるべし。然れども教材の排列を工夫し、且教授の際少しく注意するときは名組同時に較々適切なる教授をなすこと敢て難きにあらざるべし^㉞。」

このように各組同時同教材による教授という前提に立って教材配列や教授の際留意する必要を述べ、続けて留

意すべきことを以下の如く述べている。

「一事実中に於ても其の事項の難易に由り、主として下組の爲にすることゝ主として上組の爲にすることゝを予定し、教授の際卑近なることは下組に問ひ、稍高尚なることは上組に問ふが如くなすべく、又必しも一事実中に難易の事項ありて、同時に各組に向ひ平等に適切なるものを撰ぶべきのみならず、或時は卑近なる事項多き事実を撰びて下組を主眼とし、次に稍高尚なる事実を撰び、前後相待ちて全級に適切な教授をなすことあるべし²⁸。」

このように取り扱う事項、事実の難易により、ときに上組、ときに下組を主体としつつ全体として全級に適切な教授をすべきであると述べつつ、さらに次のようにも述べる。

「各組に対し同時に直接教授を為し能はざるが如くなれども、下組に発したる問題は上組の復習となり、上組に説明したることも下組の解し得ざるに少くなく、又上組に適するを主としたる事実を教授するとき、下組ハ卑近なる事実により、已に同様の教授を受けたることなれば其の事項も容易く了解し得るのみならず、却りて前の演習となり応用となることあるべく、全く一方の教授のみに偏することは殆どある事なきなり²⁹。」

修身教材（事実、事項）の特質、また全級教授における教材の取扱ひ方の注意が説かれているわけである³⁰。次に毎時の授業展開について予備、教授、応用の三段階³¹により以下の如く展開すべきであるとしている。

予備。問答法により授けようとする事実に関係を有する観念を喚起して教授の準備となす。（発問は全級に向いてなすも答を求むるは事項の難易によって上組生或いは下組生を指名する）

教授。例話を説話し、それを自己の行為に適用すべきことを教え、格言により教授事項の総括をなす。

応用。問答法により教授事項を他の事柄に応用すべきことを知らしむ。

なお教授時間25分の場合の時間配分は通常、予備5分教授15分、応用5分の割合を標準とすべきとしている。続いて下組生を主眼とした「蟻の恩を報じたる話」、上組生を主眼とした「喜兵衛の恩を報じたる話」を各々「例話」とする教授草案例が掲載されている。

③ 文部省講習会における黒田定治の見解

明治28（1895）年夏、文部省主催単級教授法に関する講習会に於いて講師をつとめた黒田定治³²は、ケール（Kerl）の説を参酌しつつ組分けの必要及びその多少、標準等について言及している。先ず組分けの数について、「其数ニツキテハ独逸ノミナラス英米猶ホ異説アリ

或ハ四組ヲ可トシ或ハ三組ヲ可トシケール氏ノ如キハ三組ヲ主張シ四組ハ教授ノ錯乱ヲ来スト非難セリ要スルニ此等ノ説モ修業年限ハ八年ノ児童ニツキテ言ヘルモノナレハ我国ノ如キ三ヶ年又ハ四ヶ年程度ノ小学校ハ右ノ割合ヲ推シテ二組ニスルヲ適当ナルカ如シト雖モ尚ホ三組若クハ四組ヲ以テ適当ナリトス³³」と述べている。

次に組分けの基準として、先ず「年齢」ということであるが、「外国ニ於テモ組分ノ標準トシテ何レモ年齢ニヨルトコロ多シト雖モ之ヲ以テ大ナル価値ヲ有スル一般ノ標準トスヘキニアラス……只標準ノ一部トシテ考ノ中ニ置クヲ以テ足レリトス³⁴」とこれにあまり重きを置いていない。その理由として「蓋シ児童ノ心意ハ各一定ノ時期ニ及ンテ活動シ且発達スルヲ恰モ活力統計ニ於ケルカ如キモノニアラサレハナリ³⁵」と組分けの根拠として薄いことを挙げている。次に「学力ニヨリテ組分スルヲハ一般ニ適当ト認メラレタル標準ナリ然ルニ小学校ニ於ケル教科目ハ修身読書作文算術習字等ノ諸学科アリ從テ児童ノ学力モ其学科ニツキ優劣アリ然ラハ何レノ学科ヲ以テ其標準ノ基本トナスヘキカ宜シク之ヲ研究セサルヘカラス³⁶」と述べ、例えばドイツ国「ジュセルドルフ」においては専ら読方の熟否を標準とすべきことを法令で規定しているが、わが国の場合は算術の学力を基準とすべきであるとしている。そしてその理由について「読書ハ家庭ニアルモ其不足ヲ補綴シ易ク且読書ノ性質タル全ク他人ノ言語ヲ模擬スルニテ専ラ記憶ニ止マレバ算術ハ之ニ反シ推理力ニ訴フルヲ以テ大ニ心力ノ鍛練ヲ要スレハナリ³⁷」と述べている。

以上「年齢」「学力」といった基準に続く三番目のものとして「学科ノ性質及教授上ノ都合」を挙げ、実はこの基準による組の自在な分合にこそ単級教授の核心があるとして次のように述べる。「年齢学力ヲ以テ組分ノ標準トスルヲハ一般ニ採用スル所ナレバ猶ホ足ラサルノ感アリ蓋シ単級教授ノ目的タル種々ノ等差アル児童ヲ同時ニ教授シテ可成好果ヲ得ントスルニアルヲ以テ從テ学科ノ性質及教授上ノ都合ヲモ計ラサルヘカラス³⁸」

すなわち「種々ノ等差アル児童ヲ同時ニ教授シテ可成好果ヲ得ントスル」ことこそ「単級教授ノ目的」とするところであり、その可能性の積極的探求のためにこそ各学科の特質等の考察の必要が力説されるのである。そしてこの点において、かの合級教授法期における白井毅等によってなされたような諸学科の特質と分類等に関する研究成果の継承が認められるのである。そうした成果を継承しつつ、さて黒田の場合であるが、諸教科目の分類について次のように述べている。

「其教科目中ニハ敢然破フルヘカラサル論理的ノ順序ヲ有シ一歩一歩ヲ進ムニアラサレハ教授シ能ハサルノ学

科アリ又幾多ノ練習ヲ積ムニアラサレハ成功セサル技術的ノ学科アリ又繁簡相混スルモ教授ノ方法ニヨリテ容易ニ其教科目ノ目的ヲ達シ得ラルモノアリ^四」

かく述べたうえで彼は教科の特質と組分けとの関連に言及する。例えば「論理的進歩ヲ要スヘキ学科ハ組分ヲ多クスルノ必用アリ^四」として算術科などはそれに該当するとし、また作文科、習字科、裁縫科、図画科などのような「各自ノ練習ニ属スル学科は組分ヲ多クスルモ妨ナシ^四」とし、結論として次のようにまとめている。読書科、作文科、習字科、算術科、裁縫科は3～4組、図画科は2～3組、唱歌科、体操科、歴史科、地理科、理科は1～2組、修身科は1組。

さて本稿で特に問題としている修身科についてのみ黒田は1組、すなわち全学年同時教授を可能ないし適切としているが、その根拠等について彼は一体どのように考えていたのであろうか。各教科毎に要旨等を論じているなかで彼は「修身科」について「修身科ハ人道実践ノ方法ヲ授ケ^四 嘉言善行ヲ教ヘ教師之カ模範トナリ以テ其目的ヲ達スルモノニシテ生徒ノ年齢学力ノ等差アルニ関セス組ヲ分シテ一団ノ生徒ニ之ヲ教フルヲ得ヘシ^四 仮令上組ニ語ルヘキ事項トテ下組生ニハ全ク理會セサルヲアルナク下組生ニ教フル事柄トシテ上組生ニ利ナラサルヲナシ^四」(傍点引用者)と学年(学力)の懸隔に拘らず全級教授の可能なのが修身科であると述べている。こうした根拠による主張は合級教授法期にもみられたものではあるが、なおここで黒田は、そのことのひとつの裏づけとしてかつての自らの体験に基づく近世藩学の教育法などを次のように回顧している。そしてそのことは修身科全級教授(口授)がわが国古来の伝統的教育方法にも根基をもつ一面を窺わせることにもなっている。

「昔時余が藩学に学びし頃老幼共に講堂に集まり黒白皆一様に聞取りたれば其中或は理解するを得ざる事も多少ありしならんも何れも皆少からざる利益を得たるは疑ふ可からざる事実なりしなり又彼の寺僧の説教なども多少仏理を解したる人或は単に南無阿弥陀仏のみを誦し得る人などを合併して行へども何れも之を信したる多少の利益を得るものなり此例或は多少妥当ならざる所あらんも殆んど大差なきものと見て差支なかるべし^四」

なお最初紹介した伊東忍も、修身学の全級教授の可能性を主張した際、多くの聴衆を一処に集合して説法した釈迦仏を例に挙げていたのであり^四、そのことと併せ、修身科口授法における伝統性、伝統的契機を示唆するものとして注目されるところである。このように古来の伝統のなかにも事例を索める形で修身科全級教授の有効性と可能性を主張した黒田であるが、さらに教授の統一、学校管理といった観点からもその必要性を主張して次の

如く述べる。

「且ツ何レノ学科モ其統一ヲ有ツコノ必用アルハ勿論ナレモ修身程各生ノ統一ヲ計リ命令ノ普カラシマ要スルモノナシ故ニ一団トシテ教授スル上ニ於テ大効アリ^四」(傍点引用者)

前にみたように修身科の全級教授の(消極的)可能性とその“例外的”実施を認める合級教授法期の論調から、上述の黒田の如き「一団トシテ教授」することの有効性ないし必要性を積極的に説くに至る推移のなかに実は等級制原理に立つ合級教授法期から、集団性を重視する学級制原理に立つ単級教授法期への教授法原理の変化が優に反映しているとみることが出来る。修身科全級教授についてのこうした認識が、後述するように多級学校化のなかでの単級方式とも見做さるべき「講堂修身」「講堂訓話」といった形態につながっていくものと推察される。例えば谷本富が帝国教育会主催で明治32(1899)年に東京府下教員に講義演説したなかに次の一節がある。

「修身科は勢ひ単級組織でなければならぬと云ふ問が出ませう、私は答へる、修身科だけは各級を分る要は無いと思ひます、尋常科などは一組にして教へることを希望します、それが若し場合に依って出来ぬならば之に近いだけのことをして貰ひたい、近頃高等師範学校附属校で講堂訓話をするやうにしたら宜からうと思ひます^四。」(傍点ママ)

この谷本の演説は修身科全級教授(単級組織)と講堂訓話との繋がりを端的に示唆してくれるが、両者の繋がりにおよび修身科全級教授の講堂訓話への発展過程に関してはなおここで、修身科教授法、とりわけ口授法と組分け、学級編成の関連についての考察が必要と思われる。

2. 修身科教授法と学級編成との関連

——「講堂訓話」の成立背景——

(1) 口授法と全級教授

先程、「論理的」「技術的」等々といった教科の特質による分類を行い、それとの関わりで各教科毎の標準的組分け数を指示した黒田定治は、修身科については1組編成とし、その根拠等をいくつか述べていたが、さらにその有力な根拠のひとつに口授という教授方法が挙げられねばならない。黒田自身も、先の講演筆記のなかで「主トシテ教師ノ口授又ハ口話ニ属スル学科ハ組数ヲ少クスルヲ得ヘシ^四」と述べ、その典型が修身科であるとしている。そしてその点では「歴史科」も修身科と類似しているとして次のように述べているのである。

「小学校ニ於ケル歴史ハ事実相互ノ関係ヲ発見シテ概括分類スルカ如キ所謂歴史哲学ノ如キモノニアラス只歴史上ノ伝記説話ヲ用テ専ラ児童ノ感情ヲ養成スルニア

ルヲ以テ歴史上ノ教授ハ事実或ハ有力ナル人物ノ話又ハ風俗人情等ノ如ヤ切々ノモノニテ可ナレハ修身科ノ如クニ組ヲ分タスシテ講談說話スルヲ得ヘシ⁴⁰」（傍点引用者）

但し「歴史科」において歴史的前後関係などを教授する場合は生徒の学力差を考慮する必要があるとして「場合ニヨリテハ最後ノ学年ニ於テ年代ヲ追ヒ整然之ヲ教授シテ時ト前後ノ関係トヲ知得セシムルモ可ナルヘク又学科課程表ニヨリ四年程度ノ小学校ニテハ二組ニ分チ教授スルモ可ナリ⁴¹」と述べている。教授内容、事項による組分けの必要は「修身科」の場合も同様で、黒田は「忠君愛国孝悌信友ノ如キ多少解釈ヲ与フルニアラサレハ到底了解シ得ラレサル⁴²」抽象的な修身上の用語を教授する際には「教師ノ心中ニハ予メ全生徒ヲ三四組ニ分類シ置キ其用語ノ解釈ハ上組ニ其實例ハ下組ニ問フカ如クスルヲ可トセン⁴³」と述べている。

いずれにしても全級教授が可能かつ有効な教育方法上の要件として口授法が捉えられているのであるが、そのことは他のいくつかの教授法書にも共通に確認されるところである。例えば能勢栄著『学校管理術 全』（明治23年・1890年）には「修身科、理科、唱歌ノ如キ口授ニテ教授セラル、学科ハ成ル可ク一教場ニ集合シテ同時ニ教フルヲ可トス、算術ノ時ニハ分チテ教ヘタル級モ是等ノ科ニ於テハ合併シテ教フ可シ⁴⁴」と述べられている。また石辰二郎と松本貢共著による『実験教授術 全』（明治25年・1892年）においては「教育勅語」に基づいた細目（教授細目）の制定が当今の急務と述べつつも「此ノ如キ編纂ハ急遽ニ稿了スベキモノニアラザルベケレバ今後数年ノ間ハ教師ハ 勅語ヲ基本トシテ口授ニヨリテ児童ヲ訓化スルノ方法ヲ取ラザルヲ得ズ⁴⁵」と口授法を採るべき事情を述べたうえで「修身口授ハ尋常科四年ヲ通シテ同一ニナスヲ得ベシ⁴⁶」とし、さらにその実際方法について次のように4学年合同と2学年ずつ合同の2つの形態を提唱している。

「(一)尋常科四組ヲ一人ノ教師ニテ教授スルトキハ全生徒ヲ一教室ニ集メテ之ニ修身ノ事柄ヲ説クシ後格言ヲ授クベシ其格言ハ一二級ニハ仮名ヲ以テシ三四級ニハ漢字ヲ以テスベシ

(二)前条ノ方法ノ外一二ノ級ヲ一組トシ三四ノ級ヲ一組トシテ毎月一回ヅ、(土曜日ノ最終時間三十分程)其級ニ適当シタル修身口授ヲナスベシ⁴⁷」

ここでは修身口授における全学年合同とやゝ等級別（学年別）原理に立った2学年ずつ合同の2形態の提唱であるが、一般的には次に述べるように修身科教授法を口授法と教科書教授に大別した場合、前者は全級合同で、後者は2学年ずつ合同でという形態が通説化してい

くことになる。いずれにしても口授に依るか否か、教科書を用いるか否かが生徒の組分けとの関連で問題にされていたことは注目されることと言わなければならない。

(2) 口授法 vs 教科書教授と組分けの関連

高等師範学校訓導藤原覚因述『尋常高等単級教授新論全』（明治32年・1899年）においては、上に示したいくつかの指摘と同様「主トシテ教師口授ヲ要スル学科ハ、組数ヲ減セサルベカラズ⁴⁸。」とあり、具体的には「修身、唱歌、体操、地理、歴史、理科等ハ、教師ノ口授ヲ待ツベキモノニシテ、此等ヲ数組ニ分テバ、同時ニ教授シカタクハ勿論、異学科ト組合ハスルモ、満足ナル授業ハナシガタキナリ。然リ而シテ此等諸学科ハ、其性質上ヨリ見ル時ハ、亦多ク組数ヲ要スルコトナシトス⁴⁹。」と口授法と組分けとの関連が述べられている。次いで「修身ノ組別」と題し、修身科が全級合同（一組）の口授法に依るべき理由がいくつか挙げられている。

ひとつは「教則大綱」（明治24年・1891年）にも明記された修身科の要旨に拠る。すなわち修身科は「専ラ知識ヲ開クコトヲ務メズシテ、寧ロ心志ヲ練修スルコトヲ主トシ、理論ヲ追ヒテ精密ニ列序センヨリハ、却テ温和ニシテ適切ナル講話ヲ以テ、生徒ノ心情ニ至大ナル感動ヲ与ヘテ、其行為ニ善良ナル影響ノ及バンコトヲ務メザルベカラズ⁵⁰。」と生徒の心情に感動を呼び起こすべき教科ゆえに「温和ニシテ適切ナル講話」という方法が最適であるとしている。かつ模範の統一という観点からも全級教授に依るべきことが述べられている。

「修身科ハ、全生徒ヲ一組トシテ口授スベシ。抑モ道德ノ教訓ニ於テハ、教師ノ模範ノ影響少ナカラザルガ、生徒ノ少長ニ応ジテ、其模倣スベキ所ヲ異ニスルガ如キハ、固ヨリ不可ナレバ、常ニ統一ヲ保タザルベカラズ。随ヒテ教訓命令等ハ、生徒ニヨリテ相違セズ、常ニ同一ニ出テ、各生徒ヲシテ齊シク信憑適從スル所ヲ知ラシメザルベカラズ⁵¹。」「模範ノ常住、教訓命令ノ同一ハ、単級尋常小学校ノ修身教授ニハ、最も切要ナルモノタルヲ忘ルベカラザルナリ⁵²。」

このように述べた藤原は、一方「現今ノ修身教科書ヲ、単級尋常小学校ノ生徒ニ持タシメテ、教授スルニハ、如何ナル方法ニ依ルベキカテフ問題モ、亦一ノ研究ナリ⁵³。」と修身教科書を用いる場合の教授方法も目下、重要な研究問題であると述べる。そしてそれについては「抑モ修身書ハ、大方其文章ニ難易ノ程度アリテ、読書力ト相関係スレバ、少クトモ甲乙ノ二組トナサザルベカラズ⁵⁴。」と2組の組分けが妥当している。しかも「而シテ之ガ用書ハ、成ルベク統合教授ノ便ヲ得ベキモノヲ、採択センコトヲ要ス⁵⁵。」と教科用書の条件について述べ

結論として藤原は「統一的修身書ノ社会ニ出デザル以上ハ、余輩ハ口授教授ヲ以テ、容易且ツ安全ト云フヲ憚ラザルナリ⁴⁹。」と述べている。

さて振り返るに修身科は、明治5（1872）年の「小学教則」における「修身口授」以来、方法的には時に教科書の編纂、使用が強調されたり、時に口授法が推奨されたり、政策の展開や文教当事者の教育方法観に関わってまさに时期的に曲折を辿っているが、現実には口授法と教科書教授とが変動的バラエティーをもちつつ併用して行われていたとみてよいであろう。（註(4)参照）したがって口授法か教科書法かという問題は森文政期をピークとしてある程度恒常的に問題として取り上げられていくものであるが⁴⁹、そこには学級編成の問題も優に関わっていたことが認められるのである。例えば与良熊太郎著『各種学級教授法』（明治27年・1894年）においては、先ず修身科における「口授教授」と「教科書教授」の得失について種々論じられている。すなわち前者は「教師己レノ意見ニ従ヒ其材料ヲ撰ミ順序ヲ定メテ適宜ニ教授スルコトヲ得ル⁵⁰」など教師の主体性が確保されるという。しかし一方「教科書ヲ持タシムルトキハ児童反復ニ便利ニシテ且学校ト家庭ト教育ノ方針ヲ同一ニスルヲ得ル⁵¹」こと、また「教師ノ交替ニ遇フモ能ク前後ヲ連絡シ且其方針主義ヲ変セサルヲ得ル⁵²」等々の事由から「今日ノ情勢ヨリ考フレハ教科書ヲ持タシムルコトノ利アルニ似タリ⁵³」との一般的結論が導かれている。

ところで与良は同書において複式（乙種）学級における修身科教授法にも言及しているが、そこでは「該科ハ反復ヲ要スルコト他ノ教科ヨリ一層必要ナルト教師専心ニシテ他ヲ顧慮スルコトナク沈静ニシテ教授スルノ要アルヨリシテ可成同教材ヲ以テスルヲ可ナリトス因リテ口授教授ナレハ四学年ノ生徒ヨリ成レル学級ニ於テモ同教材ヲ用フルコトヲ得ヘシ⁵⁴」と口授法であれば4学年同時同教材で教授し得るとするが、一方「教科書ヲ持タシムルトキハ同一文章ヲ講読セシムルトキハ頗ル困難ナレハ第一学年生ト第二学年生トヲ合シテ一部トナシ第三学年生ト第四学年生トヲ合シテ一部トナシ各部異ナル書物即チ一学級中二様ノ書物ヲ持タシムルトナシ甲部ニ修身ヲ授クルトキハ乙部ノ生徒ニハ他ノ教科ニシテ教師ノ手数ヲ要セス且学習ニ喧噪ヲ生セサル習字算術図画ノ如キモノト配合スベシ若シ専科教員又ハ准教員ヲ用フルトキハ体操唱歌ノ如キモノト配合シ別教室ニ於テ教授セシムベシ⁵⁵」と述べている。すなわち教科書教授によるときは2学年合同が限度というわけである。「但教科書ノ編纂ニシテ其宜シキヲ得ルモノアラバ全部同一ニ為スノ道ナキニモアラサルベシ⁵⁶」と単級用の適切な教科書が得られればその限りではないとしている。

他の文献等いくつか見渡しても、口授法では全級教授も可能であるが教科書を用いるとなると2学年合同したがって2組の組分けが妥当との説が一般化していることが窺える。例えば原慶次郎編纂『単級学校 附多級学校教授法』（明治25年・1892年）では、教科による組分けについて「単ニ教科目ニヨリテ分割ノ数ヲ異ニス可キノミナラス、同一教科目ト雖モ其教授事項、例ヘハ暗算ト用器算術、修身談話ト修身教科用書教授等ニヨリテ、其数ヲ変セサル可カラサルカ如シ⁵⁷」と修身談話と修身教科用書教授とはその組分け数が異なるべきことを指摘している。すなわち「例ヘハ習字唱歌体操修身ノ談話ノ如キハ、之ヲ同一様ニ教授シ得可キモ、尚ホ往々之ヲ二分ス可キ必要アリ、読書ハ教科用書異ナルカ故ニ二分シ、算術ハ問題ノ程度異ナルカ故ニ二分シ、作文ハ文題ニ難易及煩簡ノ別ヲ要スルカ故ニ二分シ、修身モ教科用書異ナルカ故ニ二分シテ教授ス可キカ如シ⁵⁸」と修身科は談話（口授）の場合は全級「同一様」かまたは2分、教科書教授の場合は2分すべきと述べている。

金沢長吉著『実験単級小学校』（明治26年・1893年）においても先ず修身科は感情を重んずる教科ゆえに同時教授法によるべきであるとして次のように述べる。

「修身は実践修行を主とすへきは勿論なりと雖も之を教科として教授するに於ては感情によること最も多し苟も感情によるべき教科たる以上は教授の際一たび起したる感情を冷却せしめず漸次其度を高むることを力めざるべからず然らざれば其教授の功を奏すること能はざるものなり故に修身の教授は起点と着点との間断続せしめざるを専要とす若し断続することあれば一度起したる感情を冷却せしめざらんと欲するも得べからざるなり然るを今此の教科を授くるに異時教授法に從ひ他の教科と組合せるときは教授に断続なからしめんとするも得べからず故に此の科は同時教授法によるを便利なりとす⁵⁹」

しかし「若し生徒に修身書の教科書を与へたるものなるときは転換教授法に従ふを可なりとす⁶⁰」とあるが、ここに転換教授法というのは「学科の順序を変換して教授するものにして例へば尋常科の三学年と四学年とを合して一組となしたときの如き三学年にも四学年にも同一読本を授け又高等科の一学年と二学年とを合して一組となしたときの如き地理或は歴史を授くるに同一事項を授くるが如⁶¹」き、要するに2学年同時同教材による教授法のことのようなのである。

修身科教授において教科書を用いるか否かという問題は、上述のように児童生徒の組分け、学級編成と関わってくるものであれば、逆にそれによって規定されるという一面もあったと思われる。『教育時論』掲載の「小学児童に修身書を持たしむるの利害」と題する記事において

は、その利害が種々指摘された末尾に「一学科を以て組織したる学級、又は同学年程の学級を以て成立したる合級教授の場合には、修身書を持たしむるを可とし、異学年を以て編成したる学級、又は単級教場に在りては、持たしめざるを可とす⁶⁶。」と述べられている。明治29（1896）年新潟県教育会に於て討議がなされた際、5個の議題のひとつが「単級、又は、二学年以上を合せて、一学級を組織する場合に於て、修身教科書を生徒各自に持たしむるの方法如何⁶⁷。」ということであった。但しこれは発題者の意向により討究題を談話題に変更、各自の経験談の披露に止まったということである。多様な論点を含んではいたであろうが、単級ないし複式学級における教科書を用いての修身科教授の困難性がこうした討議題に表われていると察することも出来るであろう。

田名部彦一著『実験学級教授術 全』（明治31年・1898年）には単級学校および複式（乙種）学級における修身科教授について「教科書を用ゐずして修身科を教授する方法は、談話若しくは問答より外なかるべきを以て、教師は余力を他に注ぐこと能はざるべし、故に同科配合法を取らんには若かずいふなり⁶⁸」と述べ、その教授法について詳述したあと「教科書を用ゐて単級小学校に修身科を教授することは、甚だ困難⁶⁹」と断じている。すなわち「同時に談話問答することを得れども、教科書の読方意義の教授を為す時には、同時同科配合法を為すこと能はず⁷⁰」したがって異種同程度の教科書四部をもって交互に教授すべきであるとしている。しかも単級用修身教科書が不備な現状では、単級学校においても多級学校用の学年別に編纂された教科書を用ゐざるを得ないが、その場合の方法は「各巻の教科書より交互に一課づつ抜きて、同事項を同時に各組に談話問答し、其の終りたる後、一部に教科書の読方意義を教授し、而して他部には復習を命ずるに在り⁷¹」としている。

結論として田名部は、単級ないし複式学級においては「寧教科書を用ゐざるの勝れるに若かず⁷²」と述べるが、「されども教科書なき時は、全く修身科を教授せざる学校あるは、著者の屢々聞見する所⁷³」と言うような実状も少なくなかったらしく「故に修身科を教授せざらんよりは、寧読書教授の弊に陥るの勝れるに若かざるなり⁷⁴」とも吐露している。

3. 多級学校化における講堂訓話の成立過程

(1) 全級口授（講堂訓話）と教科書教授の分化傾向

修身科教授法について、いくつかの資料に検討してきたように口授法と教科書教授とあるなかで、その得失、採否は学級編成のありようと密接に関わるものであった。そしておよそ口授法が推奨される傾向にあったと

言えようが、その理由としては修身科の教科書とも関わって口授法こそが全級教授が比較的可能かつ有効な方法的条件であったこと、逆にいえば単級ないし複式学級という明治20年代前後の支配的学校（学級）編成形態が口授法を支える有力な背景をなしていたとみることも出来るのではなからうか。そして学級編成形態との関連における修身科教授法についての、以上のような認識(図式)が以後、明治30年代にかけての多級学校化の傾向のなかで、一方では全校ないし複数学年生徒を一同に会して行う修身口授（講堂修身、講堂訓話）への発展形態として、他方では学年別ないし2学年編成学級における教科書による教授へという具合に時間割上も分化した形で定式化していくのではなからうか。例えば山田禎三郎著『各種学校教授改良案』（明治27年・1894年）に「教科書外ノ修身教授」との見出しで次の叙述がある。

「修身教授時間ハ一週三時間アリコハ盡ク教科書ニ依拠スル修身教授ヲ以テ填充スヘキニアラス一週一時間位ハ教科書ヲ離レ生徒ノ実行ニ関スル教訓ヲ施スヘキ此際多級学校ニ於テハ全校生徒ヲ一室ニ集メ首座教師自ラ己カ觀察シ得タル所ト受持教師ヨリ具申セン件トヲ材料トシ或ハ一般生徒ニ向ヒ或ハ特殊生徒ニ向ヒテ適切ナル訓誡ヲ与フヘシ⁷⁵」

週三時間の修身時間のうち一時間位は「教科書ヲ離レ」た教訓を行うべきこと、それも多級学校の場合は首座教員（校長）が「全校生徒ヲ一室ニ集メ」行うべきと、まさに彼がここで提唱しているものこそ講堂修身ないし講堂訓話形態のものに他ならない。なおその実施における受持教師の役割については、彼は次のように説いている。

「受持教師ハ日頃生徒ノ学力、行状、勤怠、健康、校外家庭ニ於ケル状態等ヲ調査シ置キコレヲ主席教師ニ差出スヘシ主席教師ハコレニ依リテ善ヲ褒シ惡ヲ貶シ進メルモノハ賞揚ヲ以テ益進歩セシム退ケルモノハ叱斥以テ反正セシムヘシ其教訓適切ナルトキハ一生徒ノ為メニ言フ時ニモ全生徒爾然傾聴スルニ至ルヘシ⁷⁶」

講堂訓話成立への一過程をなす全級口授と、比較的学年別教科書教授への分化傾向については明治30年代の単級学校においてもその傾向を看取することが出来る。例えば朝倉政行が明治38（1905）年に雑誌『教育研究』に寄せた「余が受持する尋常単級修身教授の概況につき本紙愛読者の質問に答ふ」との記事においては、単級学校の時間割例が掲記されているが、それによると修身科は2学年合併を対象とする教科書による教授と全校生徒対象の教科書以外の教授とが別個に設けられていることが認められる。その時間割例及びそれについての説明は以下の如くである。この時間割中「甲」は第三四学年、

土	金	木	水	火	月	曜
国綴各	修乙丙	国各	算国乙丙甲	国綴各	国各	第一時間
算各	国各	算各	修唱各	算各	修唱各	第二時間
休各	国書各	国休各	国書各	国休各	国書各	第三時間
裁甲女	算乙甲	国各	裁休甲女	手各	国各	第四時間
	修甲	国甲	算甲	国甲	休各	第五時間

「乙」は第二学年、「丙」は第一学年、「各」は甲乙丙を合わせたものであるという。上掲時間割中「修身科」は4ヶ所あるが、「一、月曜日と水曜日の修身の時間（半時間の場合）には、教科書以外の訓練に関する心得を授け、若くは、偶発の事項を取扱ふこととなり居るなり、一、金曜日の第一にある修身時間には、教科書により乙丙同教材の教授をなすなり、此の時間には、甲の児童は、居らぬなり、金曜日の第五にある修身時間には、教科書により甲の児童に教授するなり、此の時間には、乙と丙との児童は居らぬなり」との説明が加えられている。月曜と水曜の全校生徒を対象とする教科書以外の修身科教授こそ講堂訓話の如きものとみてよいであろう。

上記の例では時間割上の位置が定められているが、ほぼ月1回程度の間隔で講堂訓話が行われる場合もあったようである。大阪府師範学校附属小学校編纂による『尋常小学単級教授細目』（明治35年・1902年）においては「一学年間ヲ四十週八十時間ト予定シ講堂修身ニ要スル時間ヲ九時間ト看做シ残り七十一時間ヲ以テ他ノ教材ヲ授クルコト、セリ」とし、『尋常単級修身教本』（甲篇）と同（乙篇）を教科書に用いての「教授細目」表が同書巻末に収録されているが、（甲篇）の教科書による題目（教材）と講堂修身の組み合わせられた年間40週の配置を整理してみると次表のようになる。

第1週	児童心得 講堂修身	第4週	管 公
第2週	児童心得 同	第5週	同
第3週	がつこー 同	第6週	ヨイコドモ 同

第7週	なかよき兄弟 同	第24週	同
第8週	登校ノ心得 同	第25週	同
第9週	同	第26週	同
第10週	華山先生ノ苦学 講堂修身	第27週	舌切雀 講堂修身
第11週	華山先生ノ苦学 孝 行	第28週	舌切雀 同
第12週	同	第29週	同
第13週	同	第30週	同
第14週	さるとかに 講堂修身	第31週	同 講堂修身
第15週	さるとかに 同	第32週	公 益 同
第16週	同	第33週	同
第17週	同 講堂修身	第34週	公 徳 同
第18週	さるとかに 正直な子供	第35週	講堂修身 外国人ニ対スル心得
第19週	同 行儀作法	第36週	同 白神源次郎ノ話
第20週	同	第37週	同
第21週	しほばらたすけ 同	第38週	同 君ノ恩
第22週	講堂修身 しほばらたすけ	第39週	同
第23週	同 同	第40週	同 同

教科書教材による教授の合間に4～5週間前後（1ヶ月毎か）の間隔で講堂修身が組まれているのが判る。

(2) 講堂訓話の意義と実施方法

なおこの講堂修身、講堂訓話は、明治30年代にかけての多級化傾向のなかで特に多級学校における校長による学校統一、学校管理的意義が付与されていくこととなる。例えば小池民治は「集合教訓のこと」と題する論説において「集合といふは生徒を一ヶ所に集合せしめ教訓といふは校長ある学校ならば校長然らざれば首席教員の施すべき教訓をいふ」と集合教訓について説明し、単級学校においては教授、管理、訓練の統一が得られ教育

の効果も挙がるが、多級学校においては統一が得にくく、その統一を得るため教案の統一、管理方規の統一、教員相談会の開催などとともにこの集合教訓を提案している。また大分県師範学校附属小学校での実地経験に基づいて書かれたという『校堂訓話』（原安馬著 明治34年・1901年）には「校堂訓話は教授の一部にして訓練の一部なり又管理の一部なり⁶⁴」「校堂訓話の目的は学校に於ける教授管理訓練を統一するにあり⁶⁵」と校（講）堂訓話の意義、目的を述べ、また各教師の教科書による修身科教授に統一をもたらすものであることを強調している。なおまた講堂訓話は「学校長をして児童に接近せしむる唯一の手段」であると次のようにも述べている。

「学級多き学校にありては校長は直接各学級の児童に向て講話する機会少きが故に児童は唯其の畏敬すべき人なるを知りて親愛すべき人なることを知らず威ありて恩少し故に成るべく全校児童に接近すべき方法を採用ことは訓練上最必要の事なり……児童が平生畏敬する所の人の口より出づる修身談を聞くものなり従て感ずることも亦通常の修身科教授よりも多かるべきは勿論なり此の如くにして修身科教授の統一は保たるべし⁶⁶」

なお講堂訓話は月1回平均行われたらしく、同書には11ヶ月11回の訓話を同一人物を以て貫通する主義に基づき二宮尊徳翁、中江藤樹を教材例としての実施法が詳述されている。

なお訓話の内容であるが、伊沢修二は東京市の小学校視察にもとづく論説のなかで「校長口授ノ主旨ハ善良ナル校風ヲ造成スルニ在リサレバ毎週必ズ一回数級ヲ合併シテ教授ス⁶⁷」と校長口授の趣旨方法を述べ、口授の材料について「勸語ノ釈義」と「毎週末各受持教師ヨリ其口授ノ資ニ供スベキ偶発事項ヲ報告セシム⁶⁸」とあるように教育勸語の趣旨の浸透ということも大きな柱をなしていた。「教育に関する 勸語の主旨の実際に行はるゝ状況」と題しての栃木県地方視学鈴木亀寿の報告記事においては、勸語の浸透に関するいくつかの方法のなかに「校長自ら全校の修身科を担当し時に会集教訓を行ふ⁶⁹」「毎朝始業に先たち全校生徒を控所若くは校庭に集め職員一同列席し生徒の敬礼を受け次て校長より臨機修身談をなし以て修身教授の統一を計る⁷⁰」といった方法が挙げられている。先程紹介した「集合教訓のこと」を論じた小池民治が、同じ論説のなかで、かかる「毎朝の集会」は「唯予が近年來の実験に係るのみならず既に永く之を實行して其の効力の大なるものあり⁷¹」と述べ、例えば千葉県香取小学校などでは「明治二十三年以來之を實行せり⁷²」と紹介していることから、早いところでは「教育勸語」公布直後あたりから、勸語浸透の一方法として各教師による修身科教授とパラレルに校長による全校

訓話（集合教訓）様のものが徐々に実施されつつあったことが推測されるのである。

ここで講堂訓話の場所とその模様について考察しておきたい。講堂、ないし講堂とまではいかなくとも修身科教授のための厳肅な雰囲気包まれた特別の教室の必要性は、論としては早くから提唱されていたところであった。例えば谷本富は明治32（1899）年に帝国教育会での講演のなかで次のように述べている。

「私は是非とも修身科には特別の教室が欲しいと申します、なぜ特別の教室を欲しいか、と言ふに、どうか其修身教室に這入った時は自ら心が正しく、所謂神の前に行けば神が在りますが如くにして襟を正くすると云ふ風にしたい、……従つて修身科の教授は特に最も良い場所を選ぶと同時に、其修飾に骨を折つて貰ひたい⁷³」

前述したように修身口授に全学年合同と2学年ずつ合同の2形態を提示した石辰二郎、松本貢共著『実験教授術 全』（明治25年・1892年）においては、文字通り「修身口授ノ講堂」と題しての次の叙述がある。

「此課ヲ教授スルニハ成ルベク別ニ修身ノ講堂ヲ設ケテ全校生徒ヲ二三分シ（例ヘバ一年生ヨリ二年生マデヲ一組トシ三年生ヨリ四年生マデヲ一組トシ）其年齢識量ニ相当シタル事柄ヲ授クベシ而シテ此修身講堂ハ特ニ厳正ヲ專一トシ教具器具ノ類ハ優雅ナル者ヲ用ヒ整然之ヲ排列シ課業ノ前後ニハ楽ヲ奏シ礼ヲ嚴ニシ教師モ亦厳ニ容儀ヲ慎マザルベカラズ⁷⁴」

ところでこうした修身科のための特別の教室、講堂設置への要望はみられつつも、現状はそれに程遠かったようである。法制面からみると講堂については「教育勸語」公布後の明治24（1891）年4月8日の文部省令第二号「小学校設備準則」において「校舎ハ成ルベク講堂、物置等ヲ備フルヲ要ス⁷⁵」（第5条 傍点引用者）と規定され、また明治32（1899）年7月10日の文部省令第三七号「小学校設備準則」においては「校舎ニハ各学級ニ応スル通常教室及教員室ヲ設クヘシ⁷⁶」（第5条）との条文に続けて「前項ノ外唱歌、裁縫等ヲ課スル学校ニ於テハ便宜特別教室ヲ設ケ又必要アル場合ニ於テハ講堂、生徒控所、雨中体操場、宿直室、湯沸所、小使室、物置等ヲ設クヘシ⁷⁷」（傍点引用者）と定めている。このように講堂の設置が奨励はされつつも、それは決して積極的、強制的な調子ではなかった。一教場に教員控所を付設した程度の単級学校が主体であった明治20年代は言うまでもないとして、多級化が進行しつつあった明治30年代においてさえも、講堂等を設置しうる程の学校は極めて僅少であったと推察される。峰足三郎は『実験立案修身教授及訓練法』（明治34年・1901年）のなかで「修身ノ道ヲ説クニモ、厳肅犯ス可ラサルノ威信ヲ保タンニハ、特ニ修

身教室ナルモノヲ設ケ、倫理ノ重シムヘキ所以ヲ説クニハ、必ス其室ニ於テスヘシト、是レ一応至当ノ言タリ。是故ニ、修身教室ヲ目シテ、不用ナリト謂フ可ラサレド、今日ノ形勢ニ在リテハ、一般ノ学校ニ對シテ之ヲ望ミ難カルヘシ。⁷⁴⁾」(傍点引用者)と述べ、続けてその実状および私見を次の如く述べている。

「蓋シ一般ノ小学校ニテハ、日常必須ノ教具ハ勿論、教科書ノ如キ必需ノ品スラ、準備未タ完カラス、且相当ノ教員ヲモ聘用シ難ク、教室亦狭隘ニシテ、為ニ單級教授法を奨励スルカ如キ今日ニ於テハ、特別ニ修身科ノ為メ、一室ヲ設ケ置カンコハ、容易ナラサルヘシ。因テ設備ノ困難ナルモノニ就テハ、敢テ之ヲ強請スルニ及ハス。若シ学校ノ經濟豊カナル歟、又ハ其規模ノ宏大ナルモノニ在リテハ、必シモ之ヲ排斥スルヲ要セス、特ニ此室ヲ設クルモノ可ナリ⁷⁵⁾。」

このように施設・設備面の悪条件は、にわかには克服されないながらも、明治30年代以降の就学率の上昇、学校規模の拡大、多学級化の進行は、ますます全校統一的意義において捉えられる校長等による全校訓話の必要な状況を促すこととなり、講堂もしくはそれに代わる雨天体操場、校庭等々においての「講堂訓話」が次第に定着していくこととなる。明治末年頃における「講堂訓話」の様相を最後に一瞥しておきたい。例えば明治45(1912)年刊行の羽山好作著『伝記本位循環式講堂訓話 全』においては講堂訓話は毎月第1月曜日の第1時限、全校職員参列のもとに行うものとされているが、その「実施次第」は次の如くであった。

- 「一、校庭若くは屋内体操場に整列。
- 二、一同敬礼(楽器合図)
- 三、唱歌(模範人物の歌詞)
- 四、学校長の訓話(模範人物を中心となす)
- 五、唱歌(校歌)
- 六、一同敬礼(同上)⁷⁶⁾」

前後に唱歌を奏し、荘重厳肅な雰囲気なかで舉行されるこうした校長訓話は、まさに儀式そのものである。同書には「講堂訓話実施上の注意」が細々と記されているが、例えば講話者は出来るだけ荘重な口調で講話すべきであるとか、フロックコート、立襟白カラー、白ワイシャツ、黒ネクタイ、革製手袋、沢靴など着用すべき服装等までが規定されている⁷⁷⁾。こうした講堂訓話の様相は、修身科教授という教科教育の域をすでに脱したまさに学校儀式、学校行事であるとも言い得よう。そしてその状況は、それが「教育勅語」公布後、その浸透をはかる意図のもと次々に普及定式化されていく「祝祭日儀式⁷⁸⁾」等の様々な儀式教育と一体に組み込まれる形で展開していったものであることを推測させてくれる。同書

に、「附録」として「大祭祝日及び国民記念日訓話要目」及び同「要綱」が収録されていることもそうした推測を裏づけてくれるものである。

註

- (1) 拙稿①「単級学校教授法の形成過程における第1次小学校令期の位置づけ」(『弘前学院大学・短期大学紀要第16号』1980年3月)、②「第2次小学校令期における単級教授論の紹介導入と展開」(同上『紀要第17号』1981年3月)③「明治期教授法用語としての「単級」をめぐる諸問題」(同上『紀要第18号』1982年3月)
- (2) わが国明治以後の道徳教育史に関する研究業績は少なくない。『近代日本道徳教育史』(安里彦紀 高陵社 昭和42年)、『世界教育史大系39 道徳教育史Ⅱ』(講談社 昭和52年)、『教育勅語成立史の研究』(『海後宗臣著作集第十巻』東京書籍 昭和56年)など専ら道徳教育史を扱った単行本もあれば、『教科書の歴史』(唐沢富太郎 創文社 昭和81年)のような多数の教科書史、あるいは教育方法史研究書等にも道徳(修身科)教育史への言及が含まれている。紀要論文となるとさらに多く吉田龍次・海後宗臣「教育勅語漢訳以前に於ける小学校修身教授の変遷」(『国民精神文化研究』第一年第三冊 昭和9年)、同「教育勅語漢訳以後に於ける小学校修身教授の変遷」(同第二年第八冊 昭和10年)、藤田昌士「修身科の成立過程」(『東京大学教育学部紀要第8巻』1965年)、山本哲生「学制」期における修身科教育の意味」(『日本大学精神文化研究所 教育制度研究所紀要第五集』昭和46年)、同「西村茂樹の道徳教育観」(同前第四集、昭和42年)その他多数あるがここでのいちいちの列記は割愛致くことにする。
- (3) 「教授法改良の利害」『大日本教育会雑誌』1号(明16・11・30)44頁。
- (4) 「学制」下の文部省制定「小学教則」(明治5年・1872年)においては「修身口授」について『民家童蒙解』『童蒙教草』を下等8・7級、「泰西勸善訓蒙』『修身論』『性法略』を下等6・5級で各々用い「教師ロツカラ縷々之ヲ説論」ないし「講述」するものとされていた。(『明治以降教育制度発達史』第一巻 398頁 以下「発達史」と略記)翌6(1873)年5月の「改正小学教則」においては下等小学8・7級に「国体学口授」(週1時間)を追加、「国体訓蒙等ヲ以テ教師ロツカラ縷々之ヲ説示ス」(同前書 425頁)とされた。一方この文部省制定「小学教則」と別個に(東京)師範学校においても「小学教則」が編成され、各府県の「小学教則」の殆んどは後者に準拠するものであったという。ところで師範学校「小学教則」においては修身は独立教科として定立されておらず「読物」「問答」などの教科に未分化に包摂されていた。さらに同教則の明治8(1875)年の改定で「口授」という教科が加設され、これが修身科相当の教科とも見做し得るが、むしろ内容未分化の総合教科とみるべきものであった。(註2)掲出藤田昌士論文)明治15(1882)年12月、福岡孝悌文部卿は府県学務吏員に対する訓示のなかで「修身科用書ノ如キ最モ重要ナルヲ以テ」(『発達史』第二巻500頁)と教科書の重要性を強調し、また当時教科書編輯局長を務めた西村茂樹が「修身学ノ書ハ宜シク生徒ヲシテ熟読暗記セシムベシ」(西村茂樹編『小学修身訓』『凡例』1頁 明治13年)と主張するなど教科書重視の方法観が支配的となるが、口授法も広く行われた。明治14(1881)年4月、文部省が内示した「小学修身書編輯方大意」に、「小学ノ修身科ハ誦読ト口授トヲ兼用スヘシ」とある如く、教科書教授と口授が併用されていたのが実情であったと思われる。学事報道等にも

「修身科ハ口授ヲ用キルノ制ナレトモ嘉言善行等ハ教科書ヲ講読セシムルナリ」（『埼玉学事 田中登作』『東京若溪会雑誌』9号 明治16・9・20 26頁）などといった記述がある。

- (5) 明治14（1881）年の文部省達第十二号「小学校教則綱領」には、修身科について「初等科ニ於テハ主トシテ簡易ノ格言、事実等ニ就キ中等科及高等科ニ於テハ主トシテ稍高尚ノ格言、事実等ニ就テ児童ノ徳性ヲ涵養スヘシ又兼テ作法ヲ授ケンコトヲ要ス」（第10条）（『発達史』第二巻253頁）と規定されていた。
- (6) 『小学合級授業法』山崎輯光関 伊東忍編著 勸学堂 明治17年 56～7頁。
- (7) 本書の巻末に「時間割例」として初等科五六級、初等科三四級、中等科四六級等々いくつかの合級時間割が掲記されているが、いずれも各級各級教授の原則が窺える。ちなみに初等科三四六級の時間割は次の如くである。修身科も等級別教授となっている。

日	級	時	第一時	第二時	第三時	第四時	第五時
月	三級 四級 六級	修身 習字 修身 習字	讀方 作文 讀方 作文	作 讀 作 讀	算術 算術 算術 算術	讀方 習字 讀方 習字	
火	三級 四級 六級	○ 同 同 同	同	同	同	習字 讀方 習字 讀方	
水	三級 四級 六級	○ 同 同 同	同	同	同	讀方 習字 讀方 習字	
木	三級 四級 六級	○ 同 同 同	同	同	同	習字 讀方 習字 讀方	
金	三級 四級 六級	○ 同 同 同	同	同	同	讀方 習字 讀方 習字	
土	三級 四級 六級	○ 同 同 同	讀方 同 同	算術 同 同			

習し合う形態である。同書中に修身科の授業形態について「修身学ハ間々助教生徒ヲシテ助教セシムル場合又ハ自修及ヒ互相修学ノ方法ヲ用キル場合ヲ示シタレモハ只修身書ノ復習ニ限ルモノニシテ学科ノ目的タル徳性涵養ノ主タル方法及ヒ作法ノ如キハ教師ノ担任スベキモノナルヲハ論ヲ俟タルサルナリ」（100頁）とある。また渡辺嘉重著『改正合級教授術 完』（柳田堂藏版 明治20年）掲載の時間割例をみても二級組合、三級組合等いずれも異学科組合せであり各級各級教授の原則に立っていることが窺える。

- (8) 「教育経済論」『教育時論』21号（明治18・11・15）8頁。
- (9) 註(1)掲出拙稿①参照。
- (10) 「合級教授法」意見 白井毅『教育時論』54号（明治19・10・15）14頁。
- (11) 『学級教授術 全』白井毅 普及社 明治20年 99～100頁。
- (12) 明治19（1886）年5月公布の文部省令第八号「小学校ノ学科及其程度」によると「修身科」は「小学校ニ於テハ内外古今人士ノ善良ノ言行ニ就キ児童ニ適切ニシテ且理會シ易キ簡易ナル事柄ヲ談話シ日常ノ作法ヲ教ヘ教員身自ラ言行ノ模範トナリ児童ヲシテ善クニ之ヲ習ハシムルヲ以テ專要トス」（第10条、『発達史』第三巻40頁）と教師の「談話」によるとされている。生徒の側においては「聴罷」が要求される学科であったといえる。

- (13) 同上省令第八号において修身の一週教授時間は1時間30分とされた。（『発達史』第三巻40頁）
- (14) 註(1)掲出書 103頁。
- (15) 「合級授業ノ方法 金沢長吉」『大日本教育会雑誌』75号（明治21・5・1）348頁。
- (16) 同上 同上誌77号（明治21・7・1）537頁。
- (17) 同上 同上誌82号（明治22・1・10）56～7頁。
- (18) 修身科の時間割上の配置については「成ルヘク生徒ノ精神快活旺盛ナル時即始業時間後一二時ノ間ヲ以テ之ニ充テシムルコトヲ要ス。」（『小学修身科ノ教授法（中）尾崎正』『教育時論』465号 16頁）「修身課ハ人生社会内外ノ躬行ヲ正シ学科ナレバ之ヲ授業ノ第一時生徒ノ未ダ倦怠ヲ生ゼズテ一日ノ初回ナルトキ之ヲ授クルベシニ貫通シ易ク且ツ終日管理ノ冒頭トナルベシ」（『改正小学授業ノ方案 岐阜県山田大助』『教育時論』61号 明治19・12・25 9頁）といった意見が一般的であったが、なかには「修身を第1時に置かねばならぬやうに云ふものあれども、余はさまで、其必用を感じず」（『尋常単級の時間割 村田宇一郎』『教育実験界』11巻1号 明治36・1・10 9頁）と主張する者もあった。なお金沢は明治26（1893）年刊の『実験単級小学校』（秋田 曙堂蔵）においては修身科は毎日三十分ずつとし（明治24年の文部省令第十一号「小学校教則大綱」において修身科の毎週教授時間は8時間に倍加している…補註）体操（30分）と組合せて劳逸轉換の意図から第二時限に配置すべきと次のように述べている。「若し之を修身単級のときの如く第一の時間に置くときは体操を志て劳逸轉換の功を奏せしむることは能はざるは勿論村落学校の生徒は多分遠隔の地より通学するものなれば汗未だ乾かざるに体操場に入らざるへからざるか如きこと往々ありて却て身体の疲労を多くするの患なしとも云ふへからず故に之を第二の時間に置き体操をして劳逸轉換の功を奏せしめ傍身身体の疲労を多くするを防かざるへからず」（42～3頁）
- (19) 「合級教授論 会員 井上齋寄達」『信濃教育会雑誌』2号（明治19・11）2頁。
- (20) 「合級教授法」『教育』84号（明治23・4・25）29頁。
- (21) 同上、同上誌36号（明治23・6・25）16頁。
- (22) 「彙報 千葉県面差海上両郡教育会」『大日本教育会雑誌』60号（明治20・7・31）448頁。
- (23) 単級学校を法制化した第2次小学校令下の文部省令第十二号「学級編制等ニ関スル規則」（明治24年11月17日）の第8条には「多級ノ学校ニ於テハ教科目ノ種類ニ依リ一人ノ本科正教員数学級又ハ其一部ノ児童ヲ合シテ同時ニ教授スルコトヲ得 単級又ハ多級ノ学校ニ於テ専科正教員ハ某教科目ニ限リ一学級若クハ数学級又ハ其一部ノ児童ヲ教授スルコトヲ得」（『発達史』第三巻109頁）と規定。なお同規則の「説明」によると「単級ノ尋常小学校ニ於テハ児童ノ年齢及学力ノ等差ニ依リ之ヲ数部ニ区分シテ教授スルヲ以テ通例トス此ノ如ク区分スルモ教科目ノ種類ニ依リ又ハ同一教科目中教授ノ事項ニ依リテ数部ノ児童ニ同一ノ教授ヲ施スコトヲ得ヘク又一部ノ児童ヲ更ニ二分シテ其各半ニ特別ノ教授ヲ施スヲ要スルコトアルヘシ其一例ヲ挙ケレバ修身唱歌ノ一部分ノ如キハ甲乙丙ヲヘ乙丙ノ二部又ハ全級ノ児童ニ同一ノ教授ヲ施スコトヲ得ヘク……」（同前書110頁）とある。また「多級ノ学校ニ於テ本科正教員数学級ノ児童ヲ合セ又ハ其一部ノ児童ヲ合セテ同時ニ教授スルヲ得ヘキ教科目トハ主トシテ修身、唱歌、体操、裁縫ヲ指シタルナリ」（同前書114頁）とあり、修身、唱歌、体操等は単級・多級ともに数級合同あるいは全校合同で教授しうる教科とされていることが窺える。「これは、校長による「講堂修身」の授業などを可能にするものとなった。」（『日本近代教育百年史4 学校教育2』国立教育研究所 1974年 143頁）法的根拠と見做しうるが、それを教授法の面から

跡づけようというのが本稿の課題である。

- 24 註(1)掲出拙稿②において私は、わが国における単級教授法は、従前の合級教授法と理念的、概念的には区別されつつも教授方法のレベルにおいては折衷がみられることを指摘しておいた。
- 25 「単級教授ノ一班 須永和三郎」『教育時論』284号(明治26・3・5)21～2頁。
- 26 同上23頁。なお単級用の修身教科書は当時かなり切望されていたものであり、例えば岩手県二戸教育会において検定済教科書16種のうち主旨、事実、格言、文章、分量、字画、製本及定価等を標準に審査の結果、渡辺政吉著『実験日本修身書』と高田芳太郎著『実践修身書』が優等と認められている。その理由が何点か挙げられているが、前者(渡辺著)の長所のひとつとして「単級小学校の教科用に適すべく編纂したるを以て目下の急需に應ずるを得るのみならず又多級の小学校に用ふるも道德の全般に亘り毫も痒き処なかるべし」と述べている。(『修身書審査』『教育報知』406号 明治27・1・27 18頁)
- 27 註(1)掲出拙稿②参照。
- 28 「大日本教育会単級教授法研究組合第二回報告書(前号の続)」『埼玉教育雑誌』141号(明治28・6・5)6頁。
- 29 修身科は各組同一教材によるべくも、教授の際多少の留意が必要とされた。『理論実験学級教授法』(加納友一 同文館 明治31年)にも修身科における複式(単級)教授法について次のように述べられている。「各部同時ニ同一ノ材料ヲ以テ教授スヘシ然ルトキハ大ニ教授作業ノ手段ヲ省クノミナラス謂ハユル教授ノ統一ヲ全ウスルコトヲ得ヘシ説話ノ種類ハ各部ノ児童何レニモ適合スヘキモノヲ撰フコト固ヨリ肝要ナリト雖モ各部ノ児童思想ノ発達ニ等差アルコト勿論ナレハ同一ノ説話ヲ以テ教授スルニ当リ各部ニ通シテ悉ク適当ナラシムルコト或ハ為シ能ハサルカ如シ然レバ教授材料ノ排列ヲ工夫シ且ツ教授ノ方法ニ注意ヲ加フルキハ各部同時ニ適切ナル教授ヲナシ得ルコト敢テ難キニアラス即チ一ノ説話中ニモ必ラス其事項ニ難易ノ区分アルモノナレハ教授ノ際(以下)近ナル事項ハ下部ノ児童ニ問ヒ稍々高尚ナル事項ハ上部ノ児童ニ問フガ如クナスヘシ又タ説話ニモ難易ノ種類アルモノナレハ或時ハ卑近ナル事項多キ説話ヲ撰ヒテ下部ノ教授ヲ主トシ次ニハ稍々高尚ナル事項多キ説話ヲ撰ヒテ上部ノ教授ヲ主トシ前後相待チテ全学級ニ適切ナル教授ヲナスコトアルヘシ斯ノ如キ方法ヲ取ルキハ各部ノ児童ニ対シ同時ニ直接教授ヲナシ能ハサルカ如シト雖モ下部ノ児童ニ発シタル問題ハ上部ノ児童ノ練習トナリ上部ノ児童ニ説明シタル事項モ全ク下部ノ児童ノ解シ得サルコト少ナク又タ下部ヲ主トシタル説話ヲ以テ教授スル時ハ上部ノ児童ハ既ニ類似ノ事実ヲ以テ高尚ナル教授ヲ受ケタルニヨリ其事項ハ全ク類化シ得テ却テ前回ノ教授ノ応用トナルヘク上部ヲ主トタル説話ヲ以テ教授スル時ハ下部ノ教授ハ幾分か之ヲ了解シ得テ将来ノ教授ノ予習トナルヘク特ニ説話ノ方法ニ注意シテ各部ノ児童ニ適合スヘキラシメ且ツ下部上部何レニ適スル説話ヲ撰ヒタルキニ於テモソノ格言若クハ訓言ハ各部ノ学力ニ適合シタルモノヲ授クルカ如クセハ全ク一方ノ教授ニミ偏スルノ弊ハ殆ント之レアルコトナシ」(110頁～2頁)
- 30 わが国におけるヘルバート派の教授段階論の適用に関し稲垣忠彦氏は次のように指摘している。「明治二十年代中ごろの教案には、高師付小における形式と同じく「予備」「教授」「応用」の三段の形式をとったものが多く、五段の形式は二十八年から三十年代はじめにかけて増加している。その多くは、「予備」「提示」「比較」「統合」「応用」の段階を用い、三十年前後では、すべての教科に一律に、五段階を適用している事例が多い。明治三十三年ご

ろから、用具教科、技能教科では三段階の形式をとるものが多くなり、また、修身、内容教科についても、四段階、三段階の形式をとったものが多くなっている。」(『明治教授理論史研究』評論社 昭和41年 291頁～2頁)

- 31 黒田の人物、略歴については註(1)掲出拙稿③の註24参照。
- 32 「単級教授法大要 文部省単級教授法夏期講習会ニ於テ東京師範学校教授黒田定治氏ノ口演ノ筆記」『埼玉教育雑誌』145号(明治28・10・5)8～9頁。
- 33 同上12～3頁。
- 34 明治24(1891)年11月の文部省令第十一号「小学校教則大綱」には「修身科」の要旨について「修身ハ教育ニ関スル勸語ノ旨趣ニ基キ児童ノ良心ヲ啓蒙シテ其徳性ヲ涵養シ人道実践ノ方法ヲ授クルヲ以テ要旨トス。」(『発達史』第三巻 95頁)とある。
- 35 註32と同じ。9～10頁。
- 36 「単級教授法」『教育報知』500号(明治28・12・23)7頁。この引用部分は湯浅虎五郎の筆記による『埼玉教育雑誌』では欠落しているが、同じ黒田の演説を和歌山県尋常師範学校訓導川口孫治郎と宮本孫太郎が筆記したものが『教育報知』に掲載されており、それに拠った。
- 37 「古き例ナレバ釈迦仏ハ千二百五十人乃至三万二千人ノ聴衆ヲ一処ニ集合シテ説法セシニ浅近ナル小乗部ハ勿論大乗部ナル甚深微妙ノ法問サヘモ各々其知識ノ度ニ応シテ之ヲ解スルヲ得タリト云フ」(伊東忍『小学合級授業法』57～8頁)とある。
- 38 註32と同じ。9～10頁。
- 39 『小学各科教授法講義 全』谷本富講演 六盟館 明治32年 14頁。
- 40 註32と同じ。11～2頁。
- 41 註32と同じ。10頁。
- 42 『学校管理術 全』能勢栄著 金港堂 明治23年 125頁。
- 43 『実験教授術 全』是石辰二郎 松本貢同著 普及社 明治26年 74～5頁。
- 44 同上書 388頁。
- 45 『尋常高等単級教授新論 全』藤原因述 富山房 明治32年 36頁。
- 46 同上書 97～8頁。
- 47 同上書 90～1頁。
- 48 同上書 102～4頁。
- 49 「学制」期、明治10年代における修身科教授の方針及び状況については註(4)に述べたが、以後、森文政期においては修身科は専ら教師の「談話」によることとし教科書は基本的に用いない方針とされた。丁度この頃『教育時論』(52号、明治19・9)の「論題」欄に「尋常小学ニテ修身ヲ教授スルニ口授ト書籍ニ拠ルノ得失」が掲出され、それへの答案を含め、その問題に関する論説記事が急増する。明治23(1890)年「教育勅語」の公布後の明治24(1891)年11月17日、文相大木喬任が府県(沖縄県を除く)に発した文部省訓令第五号においては「殊ニ修身ニ於テ多数ノ教員ノ腦裏ニ一任シテ教科書ヲ定メサルカ如キハ其當ヲ得サルモノトス」(『発達史』第三巻 130頁)と教科書使用の方針となる。が、明治26(1893)年に文相に就任した井上毅は、同年8月23日、北海道庁、府県に発した文部省訓令第九号において「修身ノ教ハ専ラ師道ニ由テ挙ルコトヲ得ヘク一篇ノ教科書ニ依頼シ数時間ノ誦読ヲ以テ満足スヘキニアサルナリ因テハ……生徒用教科書ヲ用キスシテ専ラ口授法ヲ用キルコトヲ妨ケサルヘシ」(『発達史』第三巻 737頁)と口授法を推奨している。政策展開との関連における口授法をめぐる論争問題については、稿を改めて論ず

る必要があると思われる。

- 50 『各種学級教授法』与良熊太郎 富山房 明治27年 20～1頁。
- 51 同上書 29～81頁。
- 52 『単級学校 附多級学校教授法』原慶次郎編纂 文学社 明治25年 9頁。
- 53 同上書 12～3頁。
- 54 『実験単級小学校』金沢長吉著 横山栄次校 秋田 曙堂蔵 明治26年 14～5頁。
- 55 同上書 9頁。
- 56 「小学児童に修身書を持たしむるの利害」『教育時論』344号（明27・11・5）36頁。
- 57 「新潟県教育会の討究問題」同上誌 411号（明29・9・15）30頁。
- 58 『実験学級教授術 全』田名部彦一著 金港堂 明治31年 43頁。
- 59 同上書 49～51頁。
- 60 『各種学校教授改良案』山田禎三郎著 西京 村上書店 明治27年 15頁。
- 61 「余が受持てる尋常単級修身教授の概況につき本誌愛読者の質問に答ふ 朝倉政行」『教育研究』17号（明38・8・1）60頁。
- 62 『尋常小学単級教授細目』大阪府師範学校附属小学校編纂 代表稲森増次郎 宝文館 明治35年 1頁。
- 63 「集合教訓のこと 小池民治」『教育公報』192号（明30・5・5）11頁。
- 64 『校堂訓話』原安馬著 富山房 明治34年 1頁。

- 65 同上書 4頁。
- 66 同上書 35頁。
- 67 「加藤文学博士の「小学教育改良論」を駁す 伊沢修二」『大日本教育会雑誌』152号（明27・8）39～40頁。
- 68 「教育に関する 勅語の主旨の実際に行はるゝ状況 在栃木県 鈴木亀寿」『教育公報』210号（明31・4・15）36頁。なお栃木県河内郡の実況に関して「小学校長ハ必教授ヲ受持ツコト、ナスモ学級担任ノモノナクシテ修身ノ一科ヲ受持タシメテ普ク全生徒ニ近接セシムルノ方針ヲ執レリ」（千葉県香取郡役所編『復命書』明治34年 32頁）との学事報告がみられる。
- 69 註63と同じ。
- 70 註69掲出書 50頁。
- 71 註63掲出書 81頁。
- 72 『発達史』第三巻 86頁。
- 73 『発達史』第四巻 25頁。
- 74 『実験立案修身教授及訓練法』峰是三郎 博文館 明治34年 174～5頁。
- 75 『伝記本位循環式講堂訓話 全』羽山好作 明誠館 明治45年 59頁。
- 76 同上書 53～5頁。
- 77 祝祭日儀式の形成過程については佐藤秀夫「わが国小学校における祝日大祭日儀式の形成過程」(『教育学研究』第30巻第3号 1963年) 山本信良 今野敏彦著『明治期学校行事の考察 近代教育の天皇制イデオロギー』（新泉社 1973年）等が参照される。

（昭和57年11月1日受理）